

文化大革命時代における 古典名作解釈に見る文学の多面性

叢 小 榕

1. 毛沢東の評価に見る『紅樓夢』研究の政治的視点

一九六六年から一九七六年にかけて中国で行われたプロレタリア文化大革命（以下、文化大革命）初期において、既存のほぼすべての文学作品が「毒草」と見做して批判され、特に古典小説は王侯将相、才子佳人が主人公の封建時代の残渣余孽として発禁となった。しかし、文化大革命中期の一九七〇年代初頭になって、国务院総理周恩来の発案により、いわゆる四大古典名作の再版が決定し、一九七二年四月、『西遊記』、『紅樓夢』、『三国演義』、『水滸伝』が刊行され^(注1)、しかも公開発行であった。^(注2) その背景には、古典名作に対する毛沢東の評価と政治的意図があった。中でも毛沢東から一貫して高く評価されていたのが『紅樓夢』であった。それを端的に象徴する出来事は、一九七三年十二月に急遽決定した八大軍区司令相互異動時に招集した司令たちに対して、『紅樓夢』に言及したことであった。

軍に対する党の指揮権をきわめて重視し、中隊単位の配置転換まで関与していた毛沢東は、一九七一年の九一三事件（林彪事件）をきっかけに、軍内部の派閥に対する警戒をいっそう強めるようになった。その結果、大軍区のうち、八つの軍区の司令を相互異動させることに決めた。毛沢東は広州軍区に異動する予定の南京軍区司令許世友に、勧めていた『紅樓夢』を読んだかと尋ね、「一回だけでは不十分で、何回も（三回とも五回とも伝えられている）読まなければならないと指摘した。それから、書齋に集まった軍区司令たちに、『紅樓夢』の一部を暗誦したと伝えられている。^(注3) 『紅樓夢』のどの部分を暗誦したかは定かではないが、国家権力にかかわる軍区司令相互異動を命ずる場で『紅樓夢』に言及したこと、毛沢東が一貫して政治的視点で『紅樓夢』を読んでいたという事実に基づいて考えれば、政治的意図があったことは明白である。

早くも一九三八年、毛沢東は魯迅芸術学院における講演で『紅樓夢』を「極めて豊富な社会史料」として高く評価した。一九六一年、中国共産党中央政治局常務委員と各大軍区第一書記会議では、「『紅樓夢』は小説として読むだけではなく、歴史として読むべきである。社会歴史を入念に、緻密に描いたものである」と語った。従って『紅樓夢』は、賈、史、王、薛四大家族に象徴される封建官僚政治衰微の歴史を描き、封建制度の滅亡を予言するものであると毛沢東は主張する。^(注4) そのため、毛沢東の『紅樓夢』評価と紅学界の重鎮である胡適、俞平伯の『紅樓夢』研究に、同作品に対する全く異なる二系統の解釈を見ることができると毛沢東は主張する。文化大革命中に再版された『紅樓夢』に附された李希凡の「再版前言」^(注5) は、その違いを浮き彫りにしている。

帝国主义的走狗、买办资产阶级的反动文人胡适，为了反对无产阶级对待文化遗产的“历史唯

物主义的批判精神”和“严肃的战斗的科学态度”，狂热鼓吹什么“所谓真理，原不过是人的一种工具”一类的主观唯心主义的“真理”论，以及所谓“大胆的假设，小心的求证”的实用主义的伪“科学方法”，用来研究古典文学。他的《红楼梦考证》，就是这方面的代表作。

胡适根据他这种“人造的最方便的假设”，进行“小心的求证”，在他的《红楼梦考证》和《考证红楼梦的新材料》里，分析研究《红楼梦》的结果，得出了这样几条结论：

(一)《红楼梦》是作者曹雪芹的“自叙传”，“里面的甄贾两宝玉，即是曹雪芹自己的化身”。

(二)《红楼梦》“作者明明说‘此书只是着意于闺中’，又说‘作者本意原为记述当日闺友闺情，并非怨世骂时之书’”。

(三)《红楼梦》“只是老老实实的描写这一个‘坐吃山空’‘树倒猢猻散’的自然趋势。因为如此，所以《红楼梦》是一部自然主义的杰作……《红楼梦》的真价值正在这平淡无奇的自然主义的上面……”。

胡适在这里妄图用这种“自传”说完全抹杀《红楼梦》所反映的阶级和阶级斗争的社会内容，取消这部小说的暴露和批判封建制度的历史价值，否定它的艺术典型的概括意义。然而，实用主义的考据学，是无法掩盖它的唯心论的反动本质的，因为胡适的这种孤立的、狭隘的、离开社会实践的研究方法，就充分暴露了他的历史唯心主义的真面目。

俞平伯在二十年代出版时《红楼梦辨》里，对胡适的主观唯心主义的考证学亦步亦趋。据俞平伯自己讲，在胡适提出这些主张以前，他对《红楼梦》“还没有系统的研究的兴味”，等到胡适的《红楼梦考证》发表以后，“于是研究的意兴方才感染到我”。从此，他们就以通信的形式一唱一和地讨论《红楼梦》，以实践他们的主张了。俞平伯一会儿说：《红楼梦》“在中国文坛上是个‘梦魇’，你越研究便越糊涂”，一会儿又宣称：《红楼梦》是作者的自传，它的“基本观念是‘色’‘空’”，“是感叹自己身世的”，“是情场忏悔而作的”，“是为十二钗作本传的”，甚至从所谓钗黛合为一图合咏一诗的形式主义考证出发，推断出薛宝钗、林黛玉这两个完全对立的人物形象“实为一人”，即作者的“意中人”。他把胡适所考证出来的结论加以扩充吹涨，本末倒置地把小说《红楼梦》的内容变成事实考据的对象，又把史实上的曹家和小说中的贾家互相比附，使《红楼梦》的完整的艺术形象被割裂成从社会现象中孤立出来的偶然的事实碎片，妄图用这种不可知论的“自传说”，把文学青年引进烦琐考证的迷魂阵里去，以便于“无形中，养成他们的历史观念和科学方法”，都变成实用主义的信徒。于是，《红楼梦》中的贾、史、王、薛四大家族充满了内外矛盾、贯串着尖锐斗争的衰亡史，在“新红学派”的这种考证戏法里，其黑暗、腐朽，以及渗透着血腥罪恶的封建统治的毒瘤与脓疮，都被用“自叙”再加上“闺友闺情”的纱幕完全遮掩起来了，被剥削被压迫的奴隶们的痛苦与反抗消失了，贵族青年叛逆者向封建秩序和孔孟之道发起的冲击，最后是在“时间”的“感召”下“深自忏悔”了！至于在“护官符”魔影的笼罩下，那一条条命案，一笔笔斑斑血泪账，势必也当然要在“平淡无奇”的“自然趋势”里全部勾消了！

帝國主義の手先、買弁資産階級の反動文人胡適は、文化遺産に対するプロレタリア階級の「歴史唯物主義的批判精神」と「厳然たる戦闘的科学的態度」に対抗するために、「いわゆる真理とは、もともと人間の道具の一つに過ぎない」といった主観的唯心主義の“真理”、いわゆる「大胆な仮説、細心の証明」の實用主義的偽「科学的方法」を熱狂的に喧伝し、それらをもって古典文学を研究

する。彼の『紅樓夢考証』がその代表作である。

胡適はこの種の「人為的で最も便利な仮説」によって、「細心の証明」を行い、彼の『紅樓夢考証』や『紅樓夢を考証するための新たな材料』において、『紅樓夢』を分析研究した結果、以下の結論を得た。

(一)『紅樓夢』は作者曹雪芹の「自叙伝」で、「作中の甄、賈二人の宝玉は、曹雪芹自身の化身である」。

(二)『紅樓夢』の「作者は『本書はただ閨中に着意している』と言いながら、一方では『作者の本意は当時の閨中の友情を記述するところにあり、時世を怨み罵る書ではない』と言う」。

(三)『紅樓夢』は「ただ忠実に『座して食らえば山も空し』、『樹倒れば猢猻散る』の自然の成り行きを描いているだけである。ゆえに、『紅樓夢』は自然主義の傑作である……『紅樓夢』の真価はまさにこの平淡にして何の変哲もない自然主義にある」。

ここで胡適はこの「自伝」説をもって『紅樓夢』によって反映された階級と階級闘争の社会的内容を完全に抹殺し、この小説における封建制度に対する暴露と批判の歴史的価値を抹消し、その芸術上の典型的包括的意義を否定しようとした。しかし、その唯心論の反動的本質は、実用主義の考証学によって覆い隠されるものではない。なぜなら、胡適の孤立し、偏狭で、社会実践から掛け離れた研究方法自体が、その歴史唯心主義の正体を余すところなく現しているのである。

兪平伯は二十年代に出版した『紅樓夢弁』において、胡適の主観的唯心主義の考証学に追随した。兪平伯自身の言うところによれば、胡適がそれらの主張を打ち出す前には、彼は『紅樓夢』に対する「系統的研究に興味がなかった」、胡適の『紅樓夢考証』が発表されてはじめて、「研究の情熱がわたしに伝わった」ということであった。それから、二人は文通の形をもって唱和しながら『紅樓夢』を議論して、彼らの主張を実践した。兪平伯は時には『紅樓夢』は「中国の文壇において『夢魔』であり、研究すればするほどわからなくなる」と言い、時には「『紅樓夢』は作者の自伝であり」、その「基本観念は『色』、『空』であり」、「自身の身の上を嘆くものであり」、「恋愛遍歴を懺悔するために書かれたものであり」、「十二釵のための本伝を作るために書かれたものである」と言う。しかも釵黛が同じ絵を描き、同じ詩を詠むという形式主義的考証から、薛宝釵、林黛玉という全く対照的な人物像を「実は同一人物」、つまり、作者の「意中の人」と推断する。彼は胡適が考証して得た結論をさらに膨らませ、本末転倒にも小説『紅樓夢』の内容を事実考証の対象とし、また、実在の曹家と小説中の賈家とをこじつけて比較し、『紅樓夢』という渾然一体の芸術的イメージを社会現象から孤立した偶然の事実のかけらに引き裂き、その不可知論に基づく「自伝説」をもって、文学青年たちを煩雑な考証の迷路に誘い込み、それによって、「知らず知らずのうちに彼らに歴史観念と科学方法を形成させ」、悉く実用主義の信徒になることを図る。そこで、『紅樓夢』中の賈、史、王、薛四大家族の内外の矛盾に満ち、激しい闘争に貫かれた衰亡史は、「新紅学派」のその考証のマジックでは、暗黒で、腐朽し、血生臭い罪悪が込み込んだ封建統治の毒瘤や膿腫が悉く「自叙」に「閨中の友や閨中の愛」を加えたベールによって覆い隠され、搾取され抑圧された奴隷たちの苦痛と反抗が消え失せ、貴族の若い反逆者が封建秩序と孔孟の道に対する戦いが、最終的には「時間」の「感化」の下で「深く懺悔する」に至った。「護官符」の悪魔の影が立ち籠める中、失われた人々の命、血と涙に塗れた数々の出来事も、必然的に「平淡にして何の変哲

もない」「自然の成り行き」の中ですべて帳消しにされるであろう。

『紅樓夢』研究における李希凡、藍翎の兪平伯、胡適批判が毛沢東に注目されたのは、一九五四年で、山東大学の『文史哲』誌一九五四年九月号に掲載された李希凡、藍翎の「『紅樓夢簡論』及びその他」と十月十日の『光明日報』に掲載された両氏の「『紅樓夢研究』を評す」がきっかけであった。毛沢東は「三十年余以来、いわゆる紅樓夢研究の權威の誤った観点に対する最初の真剣な戦いである」として、自ら手紙を添えて、中央政府の要人たちに配布した。それから、毛沢東のこの手紙に基づいて、十月二十三日の『人民日報』で「紅樓夢研究における誤った観点に対する批判を重視すべし」などの論評が掲載され、兪平伯等の紅樓夢研究に対する政治次元の批判が繰り広げられた。文化大革命が大衆を動員し、大衆の力によって推し進めたのと同様に、紅樓夢研究批判も、最初は自発的であったと思われる若い学者たちの問題提起に着目し、それを起爆剤として全面展開に繋いだのである。李希凡、藍翎の論評に添えられた毛沢東の手紙は、文化大革命中の一九六七年五月二十七日の『人民日報』によって公開され、一九五四年からの紅樓夢研究批判は最高指導者の意志であることが明確に示された。それによって、兪平伯等の紅樓夢研究に対する批判はもはや学術論争ではなく、政治闘争そのものとなった。

李希凡の「前言」にもあるように、紅学は清朝の嘉慶、道光年間にはすでに存在していた。五四運動以後、「胡適を代表とするブルジョア階級の『新紅学派』が現れた」。『紅樓夢』誕生以来、約二世紀にわたって、紅学の分野でさまざまな研究がなされ、論争もなされてきたが、いずれも学術の範疇を出るものではなかった。しかし、共産党政権下では、毛沢東の意志によって、紅学そのものが批判の対象となり、『紅樓夢』は階級闘争の書と見做され、それ以外の研究方法は事実上タブーとなった。従って、李希凡の「前言」が毛沢東の観点を代言するものであることは言うまでもない。

2. 『水滸伝』に対する毛沢東の評価の変遷と政治的意図

明代の李贄の「忠義」説と同じ明代の左懋の「強盗」説に象徴されるように、『水滸伝』の評価については古来、賛否両論がある。その「造反」の性質から、しばしば禁書に指定されていた。辛亥革命後、白話小説に対する評価が高まるにつれ、『水滸伝』も広く読まれるようになった。評価の理由は作者の施耐庵が称するように「書いたのはすべて英雄豪傑である」というものであった。共産党政権下の一九五〇年代では、農民革命説が主流となり、政治的にも高く評価されるようになった。

毛沢東は少年時代から『水滸伝』を愛読し、革命に身を投じてから、しばしば演説や著述で『水滸伝』に言及していた。延安時代の演説で「『水滸伝』中の梁山の好漢はみな追い詰められて梁山に入ったのである。われわれもいま追い詰められて山に入り、ゲリラ戦をしている」と語るなど、梁山泊に集まる人々を英雄として尊敬していた。しかも、作中の英雄たちに対する道義上の共感や尊崇の念に止まらず、哲学の観点から分析もしていた。毛沢東の著作中でも重要な位置を占める『矛盾論』^(注6)における宋江に対する評価が一例である。

孫子論軍事説：‘知己知彼，百戦不殆。’ 他説のは作戦の双方。唐朝人魏徴説過：‘兼聴則明，偏聴則暗。’ 也懂得片面性不对。可是我们的同志看问题，往往带片面性，这样的人就往往碰钉子。《水浒传》中宋江三打祝家庄，两次都因情况不明，方法不对，打了败仗。后来改变方法，从调查情形入手，于是熟悉了盘陀路，拆散了李家庄、扈家庄和祝家庄的联盟，并且布置了藏在敌人营盘里的伏兵，用了和外国故事中所说木马计相像的方法，第三次就打了胜仗。《水浒传》上有很多唯物辩证法的事例，这个三打祝家庄，算是最好的一个。

孫子は軍事を論じて「己を知り彼を知れば、百戦殆うからず」（「彼を知り己を知れば、百戦殆うからず」 筆者）と言っている。彼が言っているのは作戦の双方のことである。唐朝の魏徴は「兼せ聴けば則ち明るく、偏り聴けば則ち暗し」と言っている。彼もまた一面性の誤りを心得ていたのである。しかし、われわれの同志は問題を見るに当たって、往々にして一面的であり、このような人はしばしば行き詰まってしまうものである。『水滸伝』では宋江は三度祝家莊を攻めるが、二度目までは状況が不明で、方法が間違っていたため敗れた。その後、方法を変え、状況調査から着手して、盤陀路を熟知するようになり、李家莊、扈家莊、祝家莊の同盟を切り崩し、外国の故事に出てくる木馬の計のように、敵營に伏兵を潜ませたら、三度目は勝った。『水滸伝』には唯物弁証法の事例が多いが、この三度の祝家莊攻撃が最もよい事例の一つである。

しかし、文化大革命中の一九七五年に、毛沢東は突然コメントを出し、『水滸伝』に対するそれまでの評価を覆した。その一部始終について、鄧榕の『わが父鄧小平「文革」歲月』^(注7) に記されている。要約すると次のようになる。

毛沢東は白内障手術を受けた後、視力が完全には恢復しなかったため、しばしば人に本を読み上げてもらった。八月十四日、北京大学の教員蘆荻に『水滸伝』を詠み上げてもらいながら、次のように語った。

「『水滸』という本はよいところが投降だ。反面教材として、投降派とはどんな者かを人民に教える。『水滸』では貪官にしか反対せず、皇帝には反対しない。晁蓋を一〇八人から排除した。宋江は投降し、修正主義を行い、晁の聚義庁を忠義堂に変え、投降の呼びかけを受け入れた。宋江と高俅との闘争は、地主階級内部の一派が他派に反対するための闘争だ。宋江は投降すると、方腊を打った」

そして、魯迅の「流氓の変遷」^(注8) の次の文を引用した。

一部《水浒传》，说得很分明：因为不反对天子，所以大军一到，便受招安，替国家打别的强盗——不“替天行道”的强盗去了。终于是奴才。

『水滸』は言うことが明確である。天子に反対しないため、大軍がやって来ると、投降の呼びかけを受け入れ、国家のためにほかの強盗——「天に替わって道を行う」ことをしない強盗を打つようになった。結局のところ、奴隸根性の持ち主である。

ちなみに、文化大革命中、四大古典名作と共に、『魯迅全集』の再版も進められていたという事実から、毛沢東を頂点とする当時の政権の魯迅に対する評価を窺い知ることができる。一方、毛沢東と違って、魯迅は最初から『水滸伝』の「天子に反対しない」一面に着目し、同作における反抗の虚偽性を暴露し続けた。それは「談金聖嘆本」^(注9)においても同様である。

宋江据有山寨，虽打家劫舍，而劫富济贫，金圣叹却道应该在童贯高俅辈的爪牙之前，一个个俯首受缚，他们想不懂。所以《水浒传》纵然成了断尾巴蜻蜓，乡下人却还要看《武松独手擒方腊》这些戏。

宋江は山中に砦を持っており、民家を掠奪するが、富者を劫掠して貧者を救済した。だが、金聖嘆は童貫、高俅らの手先の前で、皆頭を下げて就縛すべきであるというのが、彼ら（民筆者）にはわからない。だから、『水滸伝』は尻尾の折れた蜻蛉になっけていても、田舎者たちはなおも「武松片手で方腊を擒える」といった芝居を見たがる。

毛沢東が『水滸伝』批判に舵を切るに当たり、魯迅の文を引用したのは、批判の根拠とするためであることは言うまでもない。当日、蘆荻は『水滸伝』に関する毛沢東の談話を文章に整理した。そのことを知った姚文元は毛沢東に手紙を書き、「反面教材」を活かすべきだとし、毛沢東の『水滸伝』評論と自分の手紙を北京に滞在する政治局委員たちやマスメディアなどに配り、評論文を掲載するように提案したが、毛沢東は欣然として「同意」のコメントをつけた。八月二十八日、中国共産党理論誌『紅旗』に「『水滸』に対する評論を重視」をタイトルとした短評が掲載された。それから、毛沢東の夫人江青は文化部長等を招集して会議を開き、「『水滸』評論の急所は晁蓋を飾り物にするあたりだ。いま、政治局の一部の人は主席を飾り物にしようとしている」と示唆した。八月三十一日、中国共産党機関紙『人民日報』で『紅旗』の短評が転載されたほか、「『水滸』を評す」の文章が発表された。九月四日、『人民日報』で社説「『水滸』に対する評論を展開」が掲載され、『水滸伝』を評する毛沢東の談話が公表された。社説で『水滸伝』評論が政治思想上の闘争と提起されたように、毛沢東のコメントをきっかけに全国に繰り広げられた『水滸伝』評論は単なる文学評論ではなく、実際、批判の矛先は周恩来や鄧小平に向けられていた。そのことについて、周恩来も鄧小平も意識していた。^(注7)

ここで『水滸伝』評論を二つの側面から見る必要がある。一つは政治の視点を文学評論に取り入れる方法である。文学評論だからといって、政治的視点を取り入れるのは決して珍しいことではない。さきに触れた魯迅の評論もその類に属する。とりわけ毛沢東の文芸評論においては、政治的分析が主流をなす。観点のいかんにかかわらず、この種の傾向はおおよそ方法論の範疇に収まる。

もう一つの側面は文芸評論を通して、政治的意図を託したメッセージを世に送るためのものである。文化大革命時代において、絶対的権力者である毛沢東のいかなる発言も「最高指示」として「理解」され、遵われていた。そのため、『水滸伝』に関するコメントはただちに政治闘争の

檄文ととらえられ、さらに江青らによって、毛沢東の意図が明確に示された。これはもはや文芸評論の方法ではなく、政治手法の範疇となる。

このように、古典名作は純粋な文学の視点からも、政治的視点からも論評でき、さらには政治手法としても通用するのは、「文化圏や時代を超えて愛されつづける書物ほど、解釈の多面性を内包している傾向が強い」^(注10) からである。『紅樓夢』は果たして貴族の閨中を嘆くものなのか、それとも封建社会の崩壊を辿るものなのか、はたまた革命の黎明を告げるものなのか、議論は永遠に尽きないだろう。一方、魯迅によって指摘されたように、『水滸伝』は造反を掲げながら、梁山泊に集まった英雄豪傑たちは最終的に国家権力に投降した。小説として当時の社会状況から発禁の事態をかわすための苦肉の策だったのか、それとも封建王朝に迎合する意図があったのか、これも議論の余地は無限にある。いずれにしても、「同じ書物であっても、読者の知識体系によっては、「わかり方」がまったく異なり、著者が予想だにしなかった「わかり方」をするケースも見受けられる」^(注10) のだから、評論もそれぞれの視点から、無数の「正解」に辿り着く結果になる。

注

注1 《党史博览》2014年01期

注2 公開発行とは、書店での販売や一般人の購読が認められる発行。対して内部発行は、批判や参考を目的として、一定クラス以上の幹部または政治宣伝部門などの関係者だけのために出版することで、その出版物は一般人の閲読が禁じられる。

注3 人民网 《毛泽东对调八大军区司令员：“决不允许枪指挥党”》李林、毅军等

注4 人民网《毛泽东读〈红楼梦〉的独特视角》

注5 人民文学出版社《红楼梦》1973年

注6 《矛盾论》一九三七年八月

注7 《我的父亲邓小平「文革」岁月》邓榕 中央文献出版社 2010年1月1日

注8 一九三〇年一月一日上海《萌芽月刊》第一卷第一期

注9 一九三三年七月一日上海《文学》第一卷第一号

注10 『老莊思想の心理学』国分振 山入端津由 大源貴弘 叢小榕 (新潮社2013年2月)

(そうしょうよう／中国史・東洋思想)